
星を呼ぶ人

津軽 あまに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星を呼ぶ人

【Nコード】

N00770

【作者名】

津軽 あまに

【あらすじ】

閉鎖の決まった都心のプラネタリウム。

解説員の男は、閉館後忍び込んできた少年のために、最後の上映を行うことにする。

ファンタジー短編。

夜が、明ける。

白み始めた東の空に、私は思わず目を細めた。

安息の夜。

ここで全てを止めてしまえば。永遠に夜が明けなければ。それでも。

夢はいつか終わらねばならない。

夜はいつか明けねばならない。

そしてこの世界でそれをもたらすのは、他の誰でもない、私なのだ。だから。

「おはようございます。渋谷に、朝がやってきました」

144人の「観測者」に向けて、ゆっくりと、告げる。

恒星球の電源を切ると、連動するようにツァイスを囲む

白熱灯に光が灯った。

「45分間の星の旅、いかがでしたでしょうか」

館内に、安堵とも落胆ともつかぬどよめきがあった。

「本日のプログラムは、以上です。ご案内は梅村修司がいたしました」

できるだけ、いつも通りに。

「皆様、御静聴、ありがとうございました」

何度言ったかわからない締めくくりの言葉を紡ぐ。

どこからともなく、拍手が起こった。

私も、手を叩いた。

今まさに終わってしまった、この場所に敬意を表して。

ドーム内を歩くと、絨毯を踏む自分の足音が響く。

ここ数日、いつもの倍の人が詰めかけただけに、今はこの沈黙が妙に懐かしくもある。

予想外の人出はありがたかったが、もう少し早くこの賑わいがあれば、と悔やむ気持ちがないわけではない。

全ては文字通り、終わったことであるが。

直径25m。高さ13m。

今となつては「超巨大」とは言えない規模のドーム。

その中心に鎮座している巨大な造形を見上げる。

ツァイス？。

ドイツ、カール・ツァイス社が日本の要請で製作した、

国内で3台目、そして戦後初の天体投影機器。

昭和32年に完成して以来、43年間星空を描いてきた、現役稼動中の機体としては最古のプラネタリウム。

その肩書きも、今日までのものだが。

巨大な蟻、とても形容できそうな巨体に、手をかざす。

まだ、熱気を帯びている。おそらく触れれば火傷程度ではすまないだろう。

いつもであれば、メンテナンスを行なう技師や、プログラムの確認をする解説員、資料の整理で奔走する職員達も、今日は最終公演と共に去っていった。

今ごろは昔馴染みの天文ファンと、ささやかな酒宴でも開いているはずだ。

地方自治体の複合施設が目玉としてプラネタリウムを低額で提供

するようになったこと。

娯楽の多様化で、都心のプラネタリウムの集客能力に限界が見られたこと。

それが、今回の閉鎖の原因と聞かされている。

池袋にある同業も近いうちに閉鎖が決まる見込みという。

時代、と言われればそれまでだ。

映画、ビデオゲーム、テレビ、各種のレジャー施設。

確かに、娯楽は多様化したかもしれない。

それでも、星を見ること。その意義は失われてはいない。少なくとも、私はそう思う。

雪月花、という言葉がある。

一般にそれは四季それぞれで目を楽しませるものの象徴として解釈される。

即ち、冬の雪、秋の月、春の花、である。

しかし、私はこう考える。

天の月、地の花。そして、その狭間、人に降る雪。

雪月花は、天、地、人、それぞれの世界の、美の象徴と。

日本人は昔から、天。宇宙を、見つづけてきたのだと。

その頃から星空は変わってはいない。ネオンにかき消されてその多くが見えなくても、それは厳然と存在している。

いつもそこにあるもの。ただ、見えにくいだけのもの。忘れていいはずなどない。

視界の端で何かが動いた。

ツアイスを中心に放射状に並べられた百五十の椅子。

そのせいで「何か」を目で探すことは難しい。しかし。

私は絨毯を踏みしめる音を追ってゆつくりと歩いた。

ホールの絨毯は毛足が長く、足音を消すのは難しい。

それができるのは、客の邪魔にならぬよう徹底的に歩き方を叩き

込まれる、職員や解説学芸員くらいのものだ。

「どなたですか？」

座席の影を覗き込む。

そこにいたのは、……子供。

黒地に赤で「T」が刺繍された、ぶかぶかの野球帽が幼い印象に輪をかける。

「あ……はは」

気まずそうな笑いを浮かべる少年。思わず苦笑が漏れる。

「もう、閉館ですよ。わかっているとは思いますが」

予想はしていた。私だってこの場所に名残は尽きない。ファンの何人かがこうして残っている可能性は考えていた。

「やっぱり。誰もいないから、そうかもって思ってたんだ」

そうかも？ 知らなかったのだろうか？

屈み込んで皺になったズボンの膝元を払い、少年はすつくと立ち上がった。それでも私とは頭二つは違う。

「君、一人ですか」

相手と同じ目線まで腰をかがめて、問い詰める口調に成らないように気をつける。

「うん。そうだけど」

腕時計は四時五十五分を指している。早い時間ではない。

「親御さんにはちゃんと伝えてありますか？」

「……うん」

一瞬の間があった。

「それよりさ、明日、何時からやるのか教えてよ。四時限で終わるから、一時くらいからなら来られるんだけど」

取り繕うように表情を変えて聞いてくる少年。

一瞬、呆気にとられる。やはり、この子は。

「知らないのですか？」

「何を？」

「このプラネタリウムは、今日で閉館です」

少年のただでさえ大きな目が、さらに大きく見開かれる。
本当に知らなかったようだ。

「嘘だろ？ そんな」

「私も嘘であればいいと思うんですがね」

「ってことは、なに？ オレはわざわざ北千住くんだから、閉館
ほやほやのプラネタリウムにがつくりするためだけに来たってこと
？」

困惑しているのか、私に向けてというよりはむしろ独り言のような口調で、少年はまくしたてる。

北千住からここまでは千代田線から銀座線に乗り換えて三十分強

はかかる。

電車代も、子供の小遣いから考えれば決して安くはない。元北千住の住民としては、子供があゝの混雑電車を乗り継ぐ苦勞がわかるつもりだった。

「そんなに、見たかったんですか？」

「そりゃあね。このために一ヶ月駄菓子屋通いをガマンして小遣いためたんだ。……まあ、入場料は払ってないから無駄になったのは電車賃だけけどさ」

頬を膨らます少年。減らず口がいかにも下町の子らしい。

「星は、好きですか？」

「もちろん」

打てば響くような即答。

私はゆっくりと立ちあがった。そして、手近なドアを一つ閉める。少年が、困惑したようにこちらを見ている。

「何をしているんですか。君も手伝ってください」

「手伝うって……」

二つ目の扉を閉めながら、私は残りのドアを指差した。

「上映するのに、外の灯りは邪魔でしょう？」

念の為に、ホールの周囲に誰もいないことを確認する。無断で機器を使うことは決して許されることではない。だが、不思議と躊躇はなかった。

いつであつたか思い出せないくらい、私が幼かった頃。

小さな……といっても、当時の私にとってはここぐらいに大きく感じたものだが……休みだったプラネタリウムに忍び込んだことがある。そこで、職員の人が私に、特別に上映をしてくれたのだ。

記憶は曖昧で、どんな上映だったのかはほとんど覚えていないが、それがこの仕事に憧れたきっかけだった。

その恩返し。

……というのは表の理由。そんなことよりも、私自身、この子を見て生来のいたずら好きの血が騒いだのだろう。

まだこの時間ならば親も本格的に心配する時間ではない。短い上映をしたあとで電話をかければいい。

「OK、用意できたよ、おっさん」

扉を全て閉め終えた少年が、コンソールの目前にあたる席、北ブロックの一つに腰かける。

ちょうど私に背を向ける席。彼の身長では背もたれで体が隠れて、声が無ければそこに誰もいないようだった。

解説台に上る。コンソールにはドイツ語の表示。

歴代解説員の誰もそれを読めなかったにも関わらず、訳はつけられていない。

暗闇で操作をしているうちに皆、配置と機能を身体で覚えるからである。

照明の電源を落とす。連動させるようにマイクの電源を入れ、いつもの決り文句。

「それでは場内の皆さん」

「オレ一人だけじゃん」

「……言葉の綾というヤツですよ」

「ふーん」

一つ咳払いをして、もう一度最初から。

「それでは場内の皆さん。これより本プラネタリウムの最終上映を
始めさせていただきます」

少年は、急に暗くなった場内に興奮しているようだった。

「本日はようこそお越しくださいました。今回、星の旅の案内を務
めさせていただきます……」

「そんな前置きいいからさ、早く始めようよ」

じれたように少年が席を揺らす。多分クッションのバネを使って
跳ねているのだろう。

「はいはい」

照明を調整し、昼を作り出す。ツアイスは手動式で、最近の機器
のように操作をコンピュータで制御していない。

アドリブや、客層に合わせた微調整が可能であると同時に、解説
学芸員の技量が要求されるのである。

「では、渋谷に夜の帳が降りて参ります……」

太陽が早回しで天を駆け、黄昏からやがて夜へと早回しで闇がド
ームを包んでいく。

そして、いくつかの光の点が空に見え出した。

しかし、地平周囲のぼんやりとした輝きのせいで、星の多くはか
き消されてしまう。

「ですが渋谷は明るすぎて、この程度しか星が見えませんが」

「明る過ぎない？ 家からだってもうちょっと見えるよ」

「渋谷は繁華街ですからね。北千住もそうですが、こちらの方がもう少しネオンが強いんですよ」

「ふーん」

「そこで、皆さんには富士の上から見える星空をご覧にいらしましょう」

周囲の薄明かりが溶けるように消えていく。

と、天球一杯に深い蒼穹と、無数の光点が広がる。

距離感が麻痺し、独特の浮遊感を覚える。

有形のドームが無限の天へと変わる瞬間。

「すげえ……」

感嘆の声。昔の自分も、こんな気持ちで空を見ていたのだろうか。学芸員として、天文観測員として、星を追うことは私の一番の楽しみである。

が、子供時代に自分を突き動かしていたものは、今の私にまだ残っているだろうか。

「……華やかな冬の星座も西へ傾き、南からは春の星座が輝き始める。それがこの時期の星模様になります。春一番を告げるのが、夕方、日が暮れるとともに北東の空に姿を現すようになった北斗七星です」

ポイントで、北東にひとときわ輝く七つの星を指す。

「それは知ってるよ。斗ってのはひしゃくって意味なんだろう。で、北にあるから北斗七星」

少し誇らしげな口調の少年。

「その通り。実はこの七つ星は季節を問わず北の空に顔を出しているので、春の星座というわけではないのです。が、昇り際の見事さから、今が北斗の見頃だとされていますね」

「これは東京でも見えるよね」

「はい。真ん中のδ星以外は全て2等星の星列ですから。都心でも天気がよければ確認できるでしょう。ですが……」

北斗七星と、周囲の小さな星、十個が光の線で結ばれる。

「……何、これ？」

「何に見えますか？ ……といっても、難しいかもしれませんね」

天球、北斗を中心に線で結ばれた星々に重なるように、熊の絵が映し出される。

「実は北斗七星は、おおぐま座の一部で、固有の星座の名前ではないんです。この星座を都心で見るのは難しいかもしれません」

「大熊……。でもさ。この熊、やたら尻尾長くない？ 普通、熊のはぼんぼんみたいな尻尾だろ？」

「これには諸説あるんですがね。ネイティブ・アメリカンに伝わる伝説をお話しましょうか」

「ネイティブ・アメリカン？」

「北アメリカの先住民のことですよ」

「ああ、インディアンね」

インディアン……。確かに、そうなのだが。

「昔、木々には精霊がいて、夜になると木の大王の所へ集まって秘密の話し合いをしていたそうです。そこへ、一匹の熊が迷い込んでしまったのを木の大王が怒って、熊の尾を掴んで天まで放り投げてしまった」

「怒りっぽい王様だったわけだ」

「そうですね。それで、星になってしまった熊は、はずみで尻尾が伸びてしまったと」

「……少しムリがない？」

「まあ、昔話ですからね。でも、北アメリカから遠く離れたギリシヤでも、同じような話が伝わっているんです。歴史も文化も異なる、交流も考えにくい二つの世界で、同じ星を見て似たような話を考えた。そう考えると、案外、自然な発想なのかもしれませんよ？」

「ふーん。そんなもんかなあ」

天球から大熊の絵が消える。

「さて。それでは北斗七星に目を戻しましょう。ひしゃくの四辺形の先にあるα星とβ星を結んで、それを北側に5つ分伸ばしてやると……」

ポインタが北にひときわ輝く星を描き出す。

「北極星」

「ご名答」

「これ、ほとんど動かないんだよな」

「学校で習いましたか？」

「いんや。田舎で一晩見てたら、そうだった」

さも当たり前のような答え。

意外だった。最近の小学生ではどれだけ北極星の見つけ方や位置

をわかっているかどうか。

この光点の中でそれを見つけられるかどうか。それだけではない。実際の夜に、この星の特徴に、教えられずに気付くかどうか。

北極星という名前自体を知っている子供は増えた。

この星が北に位置し続けることも、それがこぐま座の尾の先端に位置する星であることも。

そういった知識を持つ絶対量は私が子供の頃とは比べ物にならないほどになった。

「北極星も二等星ですから、北の空の中では目立つ星です。星座としてはこぐま座の一部になりますね」

しかしそれは星への関心が一般化したからではない。

入学受験に出題されるからである。

星を見て、その輝きと結び付けられた知識ではない。

そんな、ただ単体としてあるだけの情報にどれほどの意味があるというのだろう。

その知が彼らの夜空を輝かせないどころか、星への関心を失わせるものであるとすれば、そののなんと貧素なことか。

「この小熊はギリシャ神話では、北斗の大熊と親子であるとされています。どちらも妖精だったのですが、……ゼウスは御存知ですか？」

「ギリシャ神話の神様だよね」

「はい。大熊はゼウスの不倫相手、小熊は二人の間に生まれた子供だったんだそうです。それが、ゼウスの奥さん、ヘレの呪いで親子ともども熊の姿にされ、星になった」

「……なんだか、しょうもない話だね」

「まあ、そうですね。昔の天界は、今で言う芸能界のようなものだったのかもしれない」

星が人を惹きつけて天文学や伝承が生まれ、それを知ることできらに人は星に魅力を見出せる。

人と星と知識、物語とは、元来そういう関係ではなかったか。

解説学芸員の仕事は決して割のいいものではない。

それでも自分がこの職をやめないのは、自分が星に物語を与えている自負があるからである。

光点の群でしかなかった星空に、人が名と物語を与えてきた歴史。それを伝える一人だという、ささやかな自負。

「北極星から真っ直ぐ視線を上にとると、冬の星座のその名残、双子座のカストルとポルクスがあります。これと、東の中天を輝くしし座の一等星、レグルスを結んだその中間を見てください」

「……なんだか、ぼやあつとしてるのがあるけど」

「それが、カニ座のプレペ星団です。街ではまず見られない薄明かりですが、双眼鏡を覗けば、小さな星が群れる美しい姿を見ることが出来ます」

少なくとも、この空間の中では、私が人々の星の見え方を操っている。

何を見ているかをコンソールで。どう見ているかを、解説で。

ある雑誌で、私の解説にはエンターテイメント性が薄い、と評されたことがある。

そこには、このプラネタリウムの機器の古さを挙げて、ダイナミックさに欠ける、恋人達のデートには不向きである、ともあった。確かに、そうかもはしれない。

ただ私は、ここで単に派手な映像や効果を楽しむだけではなく、実際に星を楽しむための知識を解説してきたつもりだった。

人々が星を見上げたとき、思い出すことが出来るように。

客観的にはただの小さな光の粒。それに古代、人々が何を見てい

たのか。その物語に思いを馳せられるように。

ひとしきり、めばしい星を解説してから、私は天球に全ての星座の絵を映し出した。

空に輝く四十あまりの春の星座。

これだけの物語が、彼の見ている空にはあるのだと。

それだけが、わかって欲しかった。

同僚が公演用に編集したというMDをかける。

どれも口ずさめるほどに暗記しているが、そういえば曲名を知らなかった。なんでもバロック期の曲を集めたらしい。

ゆつくりとチェンバロの音色が響き始め、星座の絵を全て消すと、天球には無数の星だけが残される。

黒燈々たる闇の中。

私は60倍速で夜空の時を進めるよう設定し、少年の斜め後ろの席に腰かけた。

「……見事なものですね」

「いつも見てるんだろ？」

「コンソール越しに見るのと、ここから見るのは別物です」

「オレは解説台の方から見てみたい気がするけどね」

「立ってみますか？」

「や。いい。それよりさ」

ぽつり、と少年が漏らす。

「やめるなよ。あんた」

背景に流れるチェンバロの響きのせいだろうか。少年の声は、それまでで一番、穏やかなもので。

「あんた、明日もここで、やりたいだろ。星、好きだろ」

私から彼の顔を伺うことは出来ない。が、冗談やひやかしで言っている口調ではなかった。

「オレはなんでここがつぶれるかなんて知らないけど……」

互いに追いかけあうような2台のチェンバロの音。

「それが、何だって、あんたが星好きだってこと、邪魔する理由になっただけじゃないんだ」

椅子の背もたれの向こうから、射抜かれる思いがした。

正確に紡がれ続けるアルペジオが。

少しずつ表情を変えていく空の光点が。

その一瞬をひどく長く感じさせた。

海蛇座が南西の空へと差し掛かる。

「私は」

もうじき、夜が明ける。

「……これでいいんだと思います」

この、本来あるはずの無い「おまけ」の夜が。

「ここがなくなっても、星は、なくならないですから」

アルペジオが、途切れる。

そうだ。

夜が明けても、星が無くなった訳ではない。ただ見る事ができな

いだけ。星を隠す夜明けが恨めしいこともある。けれど、それで星が身を隠すのは一時のこと。いつか必ず夜明けが夜を終わらせるように。

昼には必ず夕暮れが訪れる。

終わりが終わりであり続けたことなど、あっただろうか。

東の空が白み始めていた。

「そっか」

「はい」

60倍速のスピードで、ほの赤い光が天球に差し始める。顕わになる天球周囲の渋谷のシルエットは、開館時の43年前のもの。

加速する時。静止した時。

天の縮図たるこの場所は、過去と現在の境界を歪める空間だ。

「朝、ですね」

「……だね」

少年が、席を立った。

いつの間に脱いだのだろう。帽子をとった少年の顔に、私は言葉を失った。

「オレも、なれるかな」

彼は、真っ直ぐに、私を振り返って問いかける。

「あんたみたいに、星を呼ぶ人にさ」

地方中心に、現在日本には多くのプラネタリウムがある。

しかし、そのほとんどが、解説員を必要としないオートマチックのものである。けれど。

「君なら、絶対になれますよ」

私は断言した。

「……他人事だと思ってるだろ」

あまりにはっきり言い切ったせいだろう。少年が笑いながら聞いてきた。

「かも、しれません」

私も笑いながら答える。

彼は一つ、ゆっくりと大きな伸びをする。

「……オレ、帰るわ」

完全に、天球には光が戻っていた。
あれほど広がった夜空が、ちっぽけなドームへと。

「お父さんとお母さんに、謝るんですよ」

「ばれてたか」

「ええ。帰りに気をつけて」

背を向け、扉に手をかける少年へ声をかける。

「ん。じゃ。あんがと、おっさん」

扉が、開く。

そこで、思わず私は彼を呼び止めた。

彼に言いたいこと。言わねばならないこと。

浮かんでは、消えていく。

「……なんだよ？」

少年の怪訝そうな顔。

私は、一息をつくと

「君がもし、「星を呼ぶ人」になれたら！」

叫んだ。

「それで、今日のように閉館後に誰かがやってきたら！　そうしたら、その子の為に上映してあげてくれませんか！」

一瞬、目を見開いた後で、少年は一気に破顔する。

「決まってるだろ」

手を上げ。人懐こい笑顔を残して。

扉が、ゆっくりと閉まっていく。

未来の「星を呼ぶ人」が。

幼い頃の私と、同じ顔をした少年が。

先ほどまで少年が座っていた席の足元。

案の定、そこには黒地に赤でTと刺繍された野球帽。

数十年前のあの日、どれだけ探しても見つからなかったはずだ。

「梅村さんっ」

再び、扉が開く。解説員の後輩だった。

「まだ、いらしたんですか。誰かと話されていたとか？」

微かなアルコール臭。宴会を抜けて探しに来たらしい。

「いや」

手の中には、先ほどまで掴んでいた大洋ホエールズの野球帽は存在しなかった。

「ここには、確かに「私」しかいなかったよ」

彼に私の言葉の意味がわかるはずもなく。怪訝な顔をする後輩に、私は笑いを堪えながらツアイスの作り出す夜明けを見上げた。

全国で一番星の見えない街、渋谷。

そこで満天の星を見せ続けてきた、天邪鬼たちの夜の夢。

夢はいつか終わらねばならない。

夜はいつか明けねばならない。

そしてここでそれをもたらすのは、他の誰でもない。
だから。

「おはようございます。渋谷に、朝がやってきました」

一言残し、幻想の時間を終わらせて。

私は今度こそ、偽物の天球を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0077o/>

星を呼ぶ人

2010年10月10日13時19分発行